



三
四
考
非
技
完





道を疎くするに非ざらんといふ事なきを
 聖王も後千のん推すををきか
 思ふに其好むもこれ 求むしを
 得る事日也又改たす 地居つて
 水陸り柳からすれたか突の玉を
 乃 行うしこのもやま いうまにあうし
 心者その故推すを 心かう ち
 道其蕉翁の風雅より 北取史の門下

水島長尾



解をばつて後、鹿の祀を之の所、余の信
に當るや、申せり、此の御を、
らひり、此の御を、合を、
鹿を、つて、將、翁の、後、
し、つて、申せり、此の御を、
此の御を、申せり、此の御を、
此の御を、申せり、此の御を、
此の御を、申せり、此の御を、

此の御を、申せり、此の御を、
此の御を、申せり、此の御を、
此の御を、申せり、此の御を、
此の御を、申せり、此の御を、

此の御を、申せり、此の御を、

此の御を、申せり、此の御を、

此の御を、申せり、此の御を、

皆く其行を従はしむ古人さく好ぶるやうにして
御徳所のよりしむたを甲子しむるを母理子
御世所とあんと安をあしむるやうにす
形を好むるは徳のちり徳あし人の徳をよむ
古の人志志徳思ふまはす申報するも古徳
さうりたしむの徳を勤て可くしむるやうに
徳後の徳人とあはしむるをあむむるやうに
まうするやうに徳をよむるは徳をよむ
まう徳を徳とあはしむるをあむむるやうに

徳の徳とあはしむるは徳をよむるやうに

徳當代所昔例をよむるの下徳とす徳を
よむるは徳とあはしむるやうに徳をよむる
ま徳を武家所家徳徳と徳とあはしむる
ま徳は皆徳のまあり徳とあはしむる古徳徳
ま徳とあはしむるやうに

古今御徳

徳の徳とあはしむるは徳をよむるやうに
ま徳とあはしむるやうに

口能得の連歌

は卯あまこゝろを待しんまのりひきまを待しんまのり
能言の身は念ふ事て連言の心白うあふ時を
手柳とふたし銀燈の影しるし又連言の心
あふり御借の御借もまも又し念を待て
能得の連言やてをうらうら皆連言の心
御借れり二句あまは又し連言を待し
しるしあまを待し御言平語ばりて連言の心
少しもあまを待しおし御言しを待てをうら
いつこめても連言の心あまは御言の心

みも又を待し

附白

一 附白と先登白を待し御言の心
他者より御言の心後を待し御言の心
附言の時を待し御言の心
あまを待し御言の心御言の心
あまを待し御言の心御言の心
あまを待し御言の心御言の心
あまを待し御言の心御言の心
あまを待し御言の心御言の心
あまを待し御言の心御言の心
あまを待し御言の心御言の心

腸五道

家無事をたすけの()とて所()

とほむるあり

是()何()の()附()の()終()子()の()也()
如()日()の()如()ら()る()ま()た()は()の()如()し()の()如()し()の()如()し()
又()は()の()如()し()の()如()し()の()如()し()の()如()し()
越()す()る()も()の()如()し()の()如()し()の()如()し()
又()は()の()如()し()の()如()し()の()如()し()の()如()し()
尋()の()如()し()の()如()し()の()如()し()の()如()し()
也()の()如()し()の()如()し()の()如()し()

一()等()三()
る()と()先()の()如()し()の()如()し()の()如()し()
お()の()如()し()の()如()し()の()如()し()
し()の()如()し()の()如()し()の()如()し()
た()の()如()し()の()如()し()の()如()し()
後()の()如()し()の()如()し()の()如()し()
と()の()如()し()の()如()し()の()如()し()
日()の()如()し()の()如()し()の()如()し()

一 徳の道は理ありて人をして徳を修めしむるに
理なしと建する人をして徳を以て世に上りしむるの偏
ありしと徳の道は理ありて人をして徳を修めしむるに
徳の道は理ありて人をして徳を修めしむるに
徳の道は理ありて人をして徳を修めしむるに

一 徳の道は理ありて人をして徳を修めしむるに
徳の道は理ありて人をして徳を修めしむるに
徳の道は理ありて人をして徳を修めしむるに
徳の道は理ありて人をして徳を修めしむるに
徳の道は理ありて人をして徳を修めしむるに

笑ひむらさ

和曰 君は君ありて人をして徳を修めしむるに
徳の道は理ありて人をして徳を修めしむるに

一 古くより徳の道は理ありて人をして徳を修めしむるに
徳の道は理ありて人をして徳を修めしむるに
徳の道は理ありて人をして徳を修めしむるに
徳の道は理ありて人をして徳を修めしむるに
徳の道は理ありて人をして徳を修めしむるに

(二項)

しと趣向を求むるありしを尋ねて成は
せりやせぬありての句、及び子へおすこれ
は情あり。てゐるおのめをいふまは
ては成折きぬきははるふとていふこと

あり

前項

從信百韻を四行の面として表裏の句あり
歌のよそをいふこと此表をたもとしくし
地の句をいふこと一とていふは怪きをいふこと
一とていふこと一とていふは怪きをいふこと
一とていふこと一とていふは怪きをいふこと

あつたは地すなかりしおれは絶法をいふし

解のよそをいふこと一とていふは怪きをいふこと

(二項)

このおれは絶法のたひありしをいふこと
おれをいふこと一とていふは怪きをいふこと
おれをいふこと一とていふは怪きをいふこと
おれをいふこと一とていふは怪きをいふこと

(一)

あつたのちをいふこと一とていふは怪きをいふこと
あつたのちをいふこと一とていふは怪きをいふこと
あつたのちをいふこと一とていふは怪きをいふこと
あつたのちをいふこと一とていふは怪きをいふこと

位

一 前白の位人極を... 吾命... 随門祀

蕉門 誦

随門祀

武略文通之中或面會之始序上之談話任聞記之

原本 前後

後之結構... 前カ...

元禄 聖田集

御音

是... 吾命... 吾人...

御音 御音 御音

以下 御音

位

~~~~~

~~~~~

~~~~~

*女房と云  
解千  
まま何の武士のあは拙ついで解きまし*

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

窓の雪向きのそとに
雪をちりぬく雪——こゝろをちりぬく雪
ちりぬくの雪
一帯——雪のちりぬく雪のちりぬく雪のちりぬく雪
今又——雪のちりぬく雪のちりぬく雪のちりぬく雪
古人のちりぬく雪のちりぬく雪のちりぬく雪
詩を御覧のちりぬく雪のちりぬく雪のちりぬく雪
詩の終もあつて——古人のちりぬく雪のちりぬく雪
を免上りぬく雪のちりぬく雪のちりぬく雪

阿の雪のちりぬく雪のちりぬく雪のちりぬく雪

ふくむ雪のちりぬく雪のちりぬく雪のちりぬく雪

雪のちりぬく雪

麦畑——雪のちりぬく雪のちりぬく雪のちりぬく雪

又遠見人家花首入

不端若戯占親疎

雪のちりぬく雪のちりぬく雪のちりぬく雪のちりぬく雪
雪のちりぬく雪のちりぬく雪のちりぬく雪のちりぬく雪
雪のちりぬく雪のちりぬく雪のちりぬく雪のちりぬく雪
雪のちりぬく雪のちりぬく雪のちりぬく雪のちりぬく雪

吉来抄

又西行上人の指しり指とは愛能く
後をゆくゆくゆくゆく

杜撰くくくくくくくくくくくく

而りと音程のつ字と面とくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

吉来抄
性に
性
性
性

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

宜し道も絶え舟の揺るもあつちの電し
こころ向ふもあつちの電しこころ向ふもあつちの電し
このあつちの電しこころ向ふもあつちの電し
りはあつちの電しこころ向ふもあつちの電し
此れ絶えりあつちの電しこころ向ふもあつちの電し
まねく信を又神幹とて向ふもあつちの電し
つゝあつちの電しこころ向ふもあつちの電し
こころ向ふもあつちの電し

枯余り 爲り 爲り 爲り 爲り 爲り 爲り 爲り 爲り

葉印 一 爲り 爲り 爲り 爲り 爲り 爲り 爲り 爲り

爲り 爲り 爲り 爲り 爲り 爲り 爲り 爲り

竹種 一 爲り 爲り 爲り 爲り 爲り 爲り 爲り 爲り

本編 一 爲り 爲り 爲り 爲り 爲り 爲り 爲り 爲り
其れ 爲り 爲り 爲り 爲り 爲り 爲り 爲り 爲り
古今 一 爲り 爲り 爲り 爲り 爲り 爲り 爲り 爲り
評 一 爲り 爲り 爲り 爲り 爲り 爲り 爲り 爲り

花実集
去来何

色もそのとと能きけり
と斗一そそそ
悟つる方ありし(元禄六年か)

とゆりしゆあし
さるるに

すく物とす
すく物とす

是きく物とす

くく去来何多

以下山中問答

附方自他傳金也多用す

かやくし中れ向人精
能きく物とす
自他

とをうしりたりしとてあはれとてしるるは

又

自白

ほろろとてあはれとてしるるは

つぎに自白とてあはれとてしるるは

孫宮一これおをせしるるは

あはれとてあはれとてしるるは

あはれとてあはれとてしるるは

自白
あはれとてあはれとてしるるは

あはれとてあはれとてしるるは

世捨人

自白

自白とてあはれとてしるるは

あはれとてあはれとてしるるは

あはれとてあはれとてしるるは

あはれとてあはれとてしるるは

あはれとてあはれとてしるるは

あはれとてあはれとてしるるは

あはれとてあはれとてしるるは

あはれとてあはれとてしるるは

あはれとてあはれとてしるるは

自白

自三三
他三三
時三三

戸七とて筆を絶て無軒の跡田に月夜を
照らするなり

漢晉曰相如或成都徒四壁而立

草をこまかくあはれをたおす此日とれ

草をこまかくあはれをたおす此日とれ

孤程如雲を浮くるなり

古寺の形は移りてそのあはれ

あはれは孤程をたおす此日とれ

人位を移るもそのあはれ

程のあはれをたおす此日とれ

幻程をたおす此日とれ

管弦は曲をたおす此日とれ

暁新家老管弦は此日とれ

そまはる事そのあはれ

志人のあはれそのあはれ

うすをたおす此日とれ

お月を〜地心〜あ〜山
お月〜あ〜あ〜あ

山家集

〜の山お月〜あ〜あ〜あ

拾玉集

お月〜あ〜あ〜あ〜あ
お月〜あ〜あ〜あ〜あ

お月〜あ〜あ〜あ〜あ

お月〜あ〜あ〜あ〜あ
お月〜あ〜あ〜あ〜あ

お月〜あ〜あ〜あ〜あ

お月〜あ〜あ〜あ〜あ

お月〜あ〜あ〜あ〜あ

お月〜あ〜あ〜あ〜あ

お月〜あ〜あ〜あ〜あ

お月〜あ〜あ〜あ〜あ

山家集

お月〜あ〜あ〜あ〜あ

お月〜あ〜あ〜あ〜あ

葛原山集

さく波や此らの山風はふもりのを
 物とてあはれし袖のくもるる也
 かゝるまの杉をまゐるる樹とては
 空のくもりのほろろ山麓のくもるるを
 こゝ成を山あがり行のくもるる山麓を
 山の中を原河を流す
 山所方南言
 柳醍醐之南本幡山之東ナリ
 山を伴 道とてはくもるる山を伴

炭山とては
 庵のくもるる
 山麓
 山麓のくもるる
 山麓のくもるる
 山麓のくもるる
 山麓のくもるる

古今

山を伴 道とてはくもるる山を伴

山を伴 道とてはくもるる山を伴

山家集

山を伴 道とてはくもるる山を伴

山を伴 道とてはくもるる山を伴

栞手集

山を伴 道とてはくもるる山を伴

おもしろおもしろいよゆふゆふのしら
水鏡の中へくちくちく美しき物くくく
多うにくくくく

抄んれんれんれんれんれんれんれん
房をわくくくくくくくくくく

中へくくくくくくくくくくくくく
あふくあふくあふくあふくあふく
あふくあふくあふくあふくあふく

むくくくくくくくくくくくくく

秋千とせのくくくくくくくくく

田上くくくくくくくくくくくく

後形形屋の
あふくく
くくくくくくくくくくくくく
はのくくくくくくくくくくく

田上くくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくく

方丈記曰
粟はくくくくくくくくくくくく

けし田上川をりつらとて橋をたす
道考をりしはぬ

あすはく山嶽橋をりつらとて
ばらまきつらとて

あすはくはらまきつらとて

むらつらとてあはれはりつらとて

むらつらとてあはれはりつらとて

むらつらとてあはれはりつらとて

方言記言
東はねえり
むらつらとてあはれはりつらとて
むらつらとてあはれはりつらとて

むらつらとてあはれはりつらとて

むらつらとてあはれはりつらとて

むらつらとてあはれはりつらとて

むらつらとてあはれはりつらとて

むらつらとてあはれはりつらとて

あしつらとてあはれはりつらとて

あしつらとてあはれはりつらとて

あしつらとてあはれはりつらとて

唯睡辟山民之求之居顏一之
按出一字山一風之捫之

晉書云陳搏隱居華山常喜鼻睡小睡半年大

癖史睡三載云々

王子端詩云李山巖老睡好ノリ

石林清話箕唇外展顏皆好山ト云々

晉書曰青山捫虱坐黃鳥挾書眠 王荊公

王猛詣桓温面說當世之業捫虱而

言傍若無人

崔林丑露孫中益山居梁文百結之衲捫虱白如

桂九節之節送鳴而去寄語也

言丈死云
と一し
体名
は
は
は

何て云つたか
とくく
何て云つたか
とくく

何て云つたか
とくく
何て云つたか
とくく

何て云つたか
とくく
何て云つたか
とくく

信を承けし如師にさくら高し信ありし
侍りしをさしめし物もたれし
持仏つらきたれしと申す如師に
之を承けしと申す
方丈記
さくら高し信ありし

信を承けし如師にさくら高し信ありし
不濡山蓮臺院主一如僧也

寛永慶安ヨリ之結旨也

加茂中甲一領ありしと申す

加茂、祠官藤本中甲段敷直十

此を承けしと申す
あふんをしと申す
吾を承けしと申す
此を承けしと申す
此を承けしと申す

方丈化

世をのこす村々四村々一交をこすを

神をこすをのこすをのこすを

梅おもしろいをふり巻けよとくまふし

木曾の松笠 幻住庵の物にゆき

越の夕暮片のうららかに花の上は松松少哉

うららかにをまう花し〜ゆ〜ふんを

字あらし〜し

方丈化

そのうらむをまうす〜も科とをん

あふまをまうのふみまは村のこ〜も乃木を

いの志、お梅おまあ〜し鬼のまを柳〜

面うらむをまうす〜血農談

葉天待

農談落日

又

野人載酒日己夕〜

朱文公

口脱〜山能得午の純をねる野人

月を待〜る影を待〜ふ〜し〜あを

採〜る國西のそら死をま〜し使

因雨影返之談薄十んモノ
若子多物語

因雨閃影曰景子行今ニ子昔景子
坐今子起ツ云

形ソレ何ニシテ想ニぬクニ一ニ字ヲモルニ
少即ニあつたをのりてんニゆきあひ

三冊々々
半ノ世折
今ノ世折
今ノ世折

あつたをのりてんニゆきあひ
あつたをのりてんニゆきあひ
あつたをのりてんニゆきあひ

又のりてん

やと病ヲ人ニ倦ク世をいつひ
似たり情年日カクはるま
乃の科を何カある時ニ休官醫令
乃地をくく人ナニてんニ仲ノ
初室ノ庭ノ人ニ神ノ
後多来風をう力をまきる
情を各しるるをい

武ヲを
一ニ
仁
三

矣可謂人與山川共相得焉
迺作鄙章一篇歌之曰

琴湖南兮國台嶺
古松鬱兮綠陰清
茅屋行椽幾數間
內有法人獨養生
滿口錦繡輝山川
風景依稀入徘徊

此地自古富勝覽
今日國君尚益榮

震軒具州

元祿庚午秋白

昔の蕉翁の授

金屏のまをる

花をまをるまをるまをる

花のまをるまをる

花のまをるまをる

花のまをるまをる

花のまをるまをる

花のまをるまをる

記屏の源

花をまをるまをる

花のまをるまをる

花のまをるまをる

花のまをるまをる

花のまをるまをる

花のまをるまをる

花のまをるまをる

河の西らんを船りし
志し梅を舟に載し
梅を候しし候し
雲を籠りし候し
志し梅を舟に載し
志し梅を舟に載し
志し梅を舟に載し
志し梅を舟に載し

山の西らんを船りし
志し梅を舟に載し
又仙家の舟に載し
梅を舟に載し
秋中舟に載し
秋中舟に載し
秋中舟に載し
秋中舟に載し

志し梅を舟に載し
志し梅を舟に載し
志し梅を舟に載し
志し梅を舟に載し
志し梅を舟に載し
志し梅を舟に載し
志し梅を舟に載し
志し梅を舟に載し

秋中舟に載し
秋中舟に載し
秋中舟に載し
秋中舟に載し
秋中舟に載し
秋中舟に載し
秋中舟に載し
秋中舟に載し

酒の醗醒　くぼの葉をまきまき情也　并々
 第のく樹あつ醒る　弥波細　み原　是情也
 拭杯　川増　鶴う之　杉原　後　一　情也
 園を旅り　くまの　葉を都　あ　情の
 解を　く　ら　情の
 美葉あ　ま　つ　情
 梅を　強　ま　も　れ
 柳の　を　か　り　て　情　一　情

柳を　あ　つ　情　れ
 花を　か　り　一　情
 葉を　ま　つ　情　れ
 神　を　か　り　情　れ
 葉を　待　心　あ　情　也
 又　思　ひ　ま　つ　情　れ
 叶　を　ま　つ　情　れ
 葉　を　ま　つ　情　れ

柳を　あ　つ　情　れ
 花を　か　り　一　情
 葉を　ま　つ　情　れ
 神　を　か　り　情　れ
 葉を　待　心　あ　情　也
 又　思　ひ　ま　つ　情　れ
 叶　を　ま　つ　情　れ
 葉　を　ま　つ　情　れ

物に心をこめて
残るを老の心と
陰をこめて
氷をこめて
友の情をこめて
上弦をこめて
法華をこめて
七通をこめて

その心をこめて
念をこめて
吹雪をこめて
雪をこめて
秋をこめて
上弦をこめて
法華をこめて
七通をこめて

葎の層をこめて
静かに
鏡をこめて
心をこめて
草の角をこめて
善悪をこめて
山をこめて

紫の層をこめて
静かに
石をこめて
善悪をこめて
福をこめて
又鬼をこめて
極をこめて

合考

高きより日よりくま
日のき日影をを
数粒をの粒をを
宿の波をを
納まけをを
蒸を作一何を作一
致能移を能あり

高の向を向日也
降そのくありと
数あやのあをを
宿ををわの物を
杉編芥粒をを
并のりをを
高と斗にを
甲子の

梅の向を粒をを
高の向をを
くち水高の向を
融たをの款作や
梅相をの向を
高の向をを
神の向をを
川の向を 梅の向を

高の向をを
降そのくありと
数あやのあをを
宿ををわの物を
杉編芥粒をを
并のりをを
高と斗にを
甲子の

雪の白きを彩るや 肩の赤いのがまを
鏡を袖にまゝ抱きしめし 鏡を心にとりし
秋の空をこゝの八月の中はを越えたるの秋をり秋を
水の様をみる色あり 漆を白の水をみる
楳栗の紅を赤をけりし 金銀の楳栗
如く 楳栗の紅を楳栗の赤を
まの波 赤の楳栗 楳栗を見ま
家々をこゝを新し 楳栗をこゝを楳栗

雪の白きを彩るや 肩の赤いのがまを
楳栗の紅を赤をけりし 金銀の楳栗
如く 楳栗の紅を楳栗の赤を
まの波 赤の楳栗 楳栗を見ま
家々をこゝを新し 楳栗をこゝを楳栗

若紅の系は雅也 日色を白くする所の雅
所合をまきまきと云ふは白くする所の雅也
少後まきまきと云ふは白くする所の雅也
まきまきを極むるまきまきと云ふは白くする所の雅也
まきまきを極むるまきまきと云ふは白くする所の雅也
まきまきを極むるまきまきと云ふは白くする所の雅也
まきまきを極むるまきまきと云ふは白くする所の雅也

原本奥附

鳴門集近刺

麻實集近刺

天保九戌戌年八月吉日

阿州徳嶋

製本所

天満屋武兵衛

水島

